

紀念會祝辭四篇：文苑

著者	中川，元，内田，周平，受樂院，普行，江口，俊博
雑誌名	龍南會雜誌
巻	2 0
ページ	3 9 - 4 4
発行年	1893-11-09
その他の言語のタイトル	紀念會祝辭四篇：文苑
URL	http://hdl.handle.net/2298/4138

導テ公子ノ前ニ至ラシム公子手カラ盃ヲ賜フ榮蓋シ常人ノ知ル所ニ非ルナリ、公子ノ側、結髪ノ一翁アリ幹旋太ダ至ル(岡山子尙ノ父君ナリ)退テ席ニ復シ又タ飲ム傍ラニ深沈温順ノ士アリ坂寅夫ト云フ大學生ニシテ平戸ノ秀ナリ談論交々至ル彼曰ク須ラク予ノ宅ニ來ルベシ通宵快飲セント是ヨリ杯盤狼籍公子歸館セラル送テ復タ坐ニ來ルモノ二十人又タ飲ム(仲敬ノ兄氏亦タ坐ニアリ虎鬚茫々豪放酷ダ仲敬ニ肖タリ)酉牌陸路平戸ニ還ル衆ト篠原鐵心ノ居ニ過リ尋デ坂寅夫ノ邸ニ向フ但予困醉甚シキヲ以テ途ニシテ辭ス佐志雅郎乃チ導テ士政ノ宅ニ還ラシム士政亦タ歸ルニ及ビ共ニ寢ニ就ク中宵雅郎喚起シテ曰ク請フ共ニ山川士端ヲ訪ハント(蓋シ此夕予圖南ト士端ニ約スルニ來リ宿スルヲ以テセルニ由ルナルベシ)予初メ蹶起ノ勇ナシ雅郎ノ慫慂切ナルニ愧ザ幡然帷帳ヲ排シ士政ニ辭シテ發ス士政驚キ亦タ與ニ來ル時方ニ三更人靜ニ草眠リ婆娑タル月影獨リ笛音ノ琅々タルヲ聽ク氣韻自ラ昂ルノ感アリ途ニシテ伯敬ノ居ヲ叩キ連日ノ厚遇ヲ謝ス又タ子尙ヲ訪ヒ且ツ圖南ヲ求ム子尙士隣ト眼ヲ摩シ謂テ曰ク予等圖南ト共ニ寅郎ノ宴ニ列シ今方ニ歸テ寢ニ就キタルナリ思フニ彼レ既ニ士端ノ宅ニ投ゼシナラン乃チ雅郎ト訣レ士政士隣ト士端ノ居ニ向フ已ニ達シテ其門ヲ叩ク應聲ナシ狗吠唁々、連呼ノ聲ニ和スルニ及ビ士端始テ覺メ蹣跚トシテ出デ迎フ即チ圖南ノ來否ヲ問フ曰ク在リ意乃チ安ンズ於是共ニ床ニ臥シ又タ前後ヲ弁ゼズ

文苑

○去ぬる日の紀念會の詩歌文章を漏なくこたびの誌上に掲げてんと思ひしも限ある紙數あればろが中の二つ三つ取り出でゝ左に

編者しるす

中川學校長祝詞

本日。此校の第三回紀念式を行ふに當りて。貴顯紳士の列席を辱ふし。恭しく我天皇陛下の。曩^{なほ}降し玉ひし大詔^{おほのり}を讀み上げ奉り。錦上更に花を添ふるの盛觀を爲す。最と。畏きことにあんありける。

凡る。禮儀典例は。徒らに事の美を装ふの体裁を備ふるにはあらず。深き意義の。うが中にこもれるなり。君子は本を務むといはず。されば今日の儀式も。唯だ。禮義の形をのこ備ふるがためにはあらずして。いはゆる。本を勉むるの精心に外ならず。いかで。うが言に因みて。若きやすら男の。心の底に藏めつへべきことの。一ふしをいではやあるべき。

抑。諸子の今日あるは。誰人の賜ものありや。父母をおきて。他に其人ありともたもはれず。されば。父母に孝道をつくすは。人道の至極にして。百行の基あれば。万の道の始あり。さて又父母たる者の。各其業を營み。家道安穩あるは。其頼る所なかるべからず。こは。疑もあく。我邦の御世しろしめす。天皇の。いと厚き賜ものあるぞが。諸子は。此事を朝な夕なにゆめ忘るゝおどなく。學業を修め。操行を磨き。諸子の第二の父母たる此校の聲名を。世に揚げ知らしめむと。ひたすらに。勵み勤めて。うの本を忘れられざらんこと。ねがはしき限りある。

祝辭

第五高等中學校開校第二期紀念會開カル教授 内田周平 生徒諸子ニ諭ゲテ曰ク今ヤ國家致々トシテ人材教育ノ事業ニ勉ム而シテ此ノ九州人士ニ望ムト蓋シ最モ切ナリトス夫レ人ノ斯世ニ現存スル徒ニ

生活スルノミナラズ徒ニ衣食スルノミナラズ必ズヤ智識ヲ研鍊シ德性ヲ涵養シ同胞相親ミ上下相頼
リ以テ國家ノ美ヲナスモノアリテ而ル後ニ其品位ヲ全フスルヲ得ルナリ 窃ニ惟フニ我が大八洲天
地中和ノ精ヲ孕ミテ東海ノ表ニ產出シ 皇祖首ニ忠孝ヲ以テ寶訓ヲ垂レ玉ヒシヨリ仁漸義摩茲ニ二
千五百有餘年時ニ治亂アリ世ニ汗隆アリト雖モ深仁厚澤民ノ骨髓ニ淪ミ其山川草木ニ浸漸セリ是ヲ
以テ人々信義ヲ尙ビ禮節ヲ重ンジ武ニシテ而モ虐ニ至ラズ文ニシテ而モ侈ニ至ラズ其精明英毅ノ性
士民ノ衷ニ蘊藏蓄積スル者一タビ機會ト相觸ルレバ將ニ勃々發洩シテ遏ムベカラザルアラントス然
レドモ精シク之ヲ言ヘバ民ノ氣風モ亦國土ニ由リテ差異ナキ能ハズ吾レ之ヲ聞ク人ノ性情ハ天地山
河ノ氣ト相通ズ山河ノ氣厚ケレバ則チ其民ノ氣ヲ稟クルモ亦厚シト又之ヲ聞ク父母祖先ノ墓ニ上レ
バ情至リテ止ム能ハズト今夫レ九州ノ地仰ギテ其ノ山ヲ望メバ峨々トシテ氣骨ヲ露ハシ俯シテ其水
ヲ眺ムレバ浩々トシテ清ク且ツ駛シ田野ニ往ク嘉禾茂々タリ山林ニ遊ブ喬木鬱々タリ其耳目ノ接觸
スル所固ヨリ以テ心志ヲ養フニ足ル況ンヤ遠ク之ヲ史乘ニ求ムレバ 神武帝ノ奮ヒテ以テ行ヲ啓キ
玉ヒシ所 神功后ノ進ミテ以テ武ヲ揚ゲ玉ヒシ所其遺趾古廟今猶儼存ス蒙古ノ強冠ハ之ヲ筑海ニ殲
シ万古護國ノ標準ヲ垂レ菊池ノ一流ハ濁世汗サレズ千載勤王ノ模範ヲ遺セリ降リテ近古ニ及ビ嶋津
氏ノ若キアリ大友氏ノ若キアリ龍造寺ノ若キアリ立花氏ノ如キアリ各雄チ一世ニ振ヒ之ガ臣タルモ
ノ謀將猛士雲ノ如ク林ノ如ク陸續輩出シ各々忠節ヲ其ノ事フル所ニ致サバルハナシ蓋シ其風土ノ感
染スル所其祖先ノ遺傳スル所以テ今日ニ至リ九州人士ガ質朴剛毅ノ氣風ヲ養生セシコト詢ニ深ク且
ツ遠シ我が國家ノ九州人士ニ望ムト最モ切ナル豈ニ其故ナカラシヤ然レドモ今ノ大八洲ハ昔ノ大八
洲ニ非ザルナリ何ンゾヤ昔ハ則チ肅然トシテ鎗ヲ鎖セリ今ハ則チ洞然トシテ門ヲ開ケリ門ヲ開ケバ

則チ萬邦ト對接セザルベカラズ昔ノ戰ヤ臨時トナス今ノ戰ヤ平日ニ在リ昔ノ戰ヤ專ラ力ヲ用ユ今ノ戰ヤ主トシテ智ニ賴ル心智磨カザレバ以テ大用ヲナス能ハズ我が國家ノ特ニ高等中學ヲ五方ノ域ニ設立スル所以ノ者安ソウ其地方千載蓄藏スル固有ノ良性ヲ挑剔シテ而シテ之ヲ浚新シ更ニ注グニ文明ノ智術ヲ以テスルニ在ルニ非ルヲ知ランヤ吾ガ第五高等中學校ハ巍然トシテ鎮西ノ中央ニ立チ以テ九州教育ノ樞軸ヲ秉ル猶ホ北辰ノ高ク其所ニ居リテ光輝ヲ放ツガ如シ凡ソ西ヨリ東ヨリ南ヨリ北ヨリ躋ヲ躋ミ笈ヲ負ヒ來リテ此ニ學ブ者向フ所同カラズ操ル所各々異ナリト雖モ之ヲ概スルニ立身ノ志ヲ抱キ報國ノ念ヲ存シ意氣勇往進ミテ爲スアラント欲ス皆一郷ノ俊一郡ノ英ニ非ルハ莫シ然ラバ則チ吾ガ第五高等中學校ハ九州ノ雋傑ヲ羅致セル者ト謂フテ可ナリ異日海内ノ人ヲシテ首ヲ擧ゲテ西望シ善ク秩序ヲ守リ課程ヲ履ミ學成リテ國家ノ用ヲ爲スモノハ多ク第五高等中學校ヨリ出ヅト曰ハシムルニ至ル豈ニ此ノ地方ノ一大榮譽ニ非ズヤ諸子各々其責任ノ重ク且ツ大ナルヲ思ヒ今ヨリ以往宜シク益其体軀ヲ壯健ニシテ其志操ヲ堅固ニシ其心意ヲ誠實ニシ其智能ヲ開發シ其學識ヲ増進シ上以テ國家ノ事業ヲ翼贊シ下以テ祖先ノ名聲ヲ顯揚スベシ若シ然ラズシテ身ヲ持スルコト重カラズ心ヲ注グコト專ラナラズ因循苟且怠惰放逸中途ニ彷徨シ下流ニ流淪シ精采ナク氣力ナク落花ノ春雨ニ委スルガ如ク枯草ノ秋風ニ散スルガ如クナレバ此レ獨リ國家育英ノ盛意ニ背クノミナズ抑モ亦斯ノ雄峻清烈ナル九州ノ山河ニ背クトナスナリ周平不敏員ニ教授ニ備ハル年アリ爰ニ本校開校三周年ノ佳節ニ逢ヒ教育ノ功効年ニ漸ニ顯ハレ諸子ノ學業日ニ益々躋ルヲ見テ抃喜ニ堪ヘズ敢テ思フ所ヲ攄ブル此ノ如シソノ頌ニ代ニルニ規ヲ以テスル者ハ蓋シ生徒諸子ノ成ルヲ玉ニセント欲スレバナリ

明治廿六年十月十日

内田周平

祝詞

養成人物至難之事也而又至要之事矣是實國家之大事文明之根原而又學校之所以由起也蓋眞英育者非管增進才藝之謂善磨德勤道以立爲人之本而又善啓發智能所謂計才德兩全者是眞育英者而學校之所以設豈外於此哉今也天下滔滔捨樸走文從育英之事者或以徒進才智是事或以管磨藝能爲足至道之本源如置而不問者蓋謬矣而獨立此中不流世風朝說學理深奧夕教道德本源所謂以眞育英自任者吾於我校見之也是此校設立之所以可喜而又其紀念之所以可祝也然而我校創立以還雖未至經久日進月步彬彬無極良師日加良弟子日集諸事日整而師懇々弟淳々善相和共勵業焉於是乎既能至卒業者幾十人皆入大學之門是蓋鎮西之粹天下之俊秀譬蛟龍之將得雲雨者也而又五百同朋學於此者皆受眞育英是所謂鳳雛之潛深山者奚知他日無爲眞人物哉嗚呼內外之盛比之前日其何如哉是紀念之所以最可祝也茲明治廿六年十月十日舉第三回紀念之式吾追憶既往照之現今而喜其進步非前日又思如他日之見今今之見前日也歡喜不能措則陳撫辭以謹祝

明治廿六年十月十日

本科生總代受樂院普行 再拜

祝詞

龍南ニ伏氣アリ異光明滅而シテ其瑞カ妖カヲ知ラズ世人領テ引テ凝視シ入シク其發ヲ待ツ去年火光
一閃氣ノ秀ナルモノ一團飛デ東洛ノ奥ニ入リ今年再閃復タ其地ニ移ル火光尙未ダ幽ナリト雖モ獨リ
凜乎トシテ其レ銳ニ純乎トシテ其レ精ナリ是ニ於テカ人稍其氣ノ何タルヲ識ル而シテ伏氣日ニ益多
キヲ加ヘ異光日ニ愈昭昭龍山高カラザルモノニヨリテ以テ其翠ヲ増シ白川深カラザルモノニヨリテ
以テ其勢雄ナリ然リト雖モ氣ノ妖瑞ニ至テハ未ダ遽ニ知ル可カラズ若シ夫レ一旦此氣開裂怒遡スル
ノ曉ニ至ラバ將ニ妖雲暗澹毒霧四塞高千穗ノ峯壽安鎮國ノ山空ク瘴癘氣中ニ湮沒セラレントスルカ
將タ又玖摩ノ流筑紫次郎ノ水愈長ク愈明ニ正氣萬丈瑞光輝々九國千里ノ野ニ布滿シ滅没セル倒影復
タ望ム可カラザルニ至ラントスルカ氣只獨リ自ラ識ルアランノミ第三回開校紀念會ニ當リ聊カトシ
デ以テ祝詞ニ代ニ

明治廿六年十月十日

第五高等中學校豫科生徒總代

江口俊博 敬具

第五高等中學校第三回紀念會

を祝ひて

吉田 豊

たふびく極み 青雲の ほかふす限り
行鳥の 群がる友を 玉矛の

不知火の 筑紫の國に ろびえたつ
學の園の 開けしゆ 三年としるす

千代の後まで

いやさかゆらん

今日の日を 祝へははむ 白雲の

返歌